

RN-004

互酬的仮想通貨を用いた研究者評価システムの研究

Research on Researcher Evaluation System with Interdependent Virtual Currency

井出 明†
Akira Ide

1. はじめに

従来、学問の世界における研究者の評価は、主として citation (被引用回数) によってなされることが多かった。しかし、このような手法は、以下のような問題に直面している。

- ①文系の場合、批判のための引用というケースが多くあるため、citation の回数が研究者としての評価を決めるとは限らない。
- ②論文化されていない啓発的な先行研究や先人の発言に対する感謝の気持ちを表すことが出来ない。
- ③様々な先行研究が後の研究に与える影響の大きさを個別に記述することが出来ない。
- ④研究者間の知的影響は一方的なものでなく、錯綜したものであるが、それを表現することは難しい。

今回はこのような問題点を克服するため、謝意を含んだ互酬的仮想通貨による研究者評価システムの提案を行う。

そこで、いろいろな学術的影響を可視化し、啓発を与えてくれた人々に感謝の意を示す仕組みとして、今回、ここである学会の全メンバーが参加する仮想通貨システムを提案する。この仮想通貨システムは、以下のルールで運用される。

- ①全学会員にポイントとして、500IPSJ などといった仮想通貨単位で給付する。
- ②この仮想通貨は、一定期間 (仮に1年) 以内に、他の学会員にプレゼントしなければならない。プレゼントの対象となる人は、この1年間に送り元に知的影響を与えた人とする。プレゼントの単位はいくらでも良く、数百人に分けて与えても良いし、逆に一人に集中してプレゼントしても良い。ただし、1年使わなかった場合、この通貨は失効する。
- ③通貨を受け取った人は、そのまま手元に置いても良いし、更に誰かに渡しても良い。

2. 提案するシステム

我々の知識の構造は、言わば「巨人の肩」に乗っているものであり、知識が単独で生み出されることはほとんど無い。しかも、その啓発関係は、一方的なものではなく、図1が示すような錯綜したものである。換言すれば、あるものが他者に啓発を与えても、その啓発は回り回って元の研究者に再度啓発を与えるということがあり得るのである。さらに、我々の研究が進化するにあたっては、しっかりとしたペーパーベースの先行研究の他に、学会での質疑応答や、講演会における大御所の発言など様々な形態による影響があり得る。

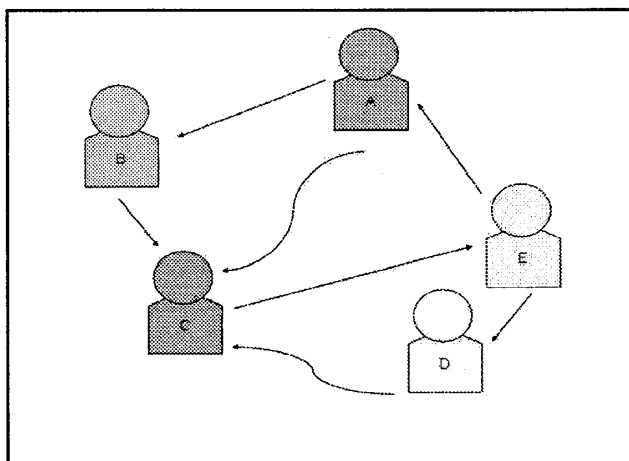


図1 我々の知識流通構造

3. 結果の活用と分析

一年を通じた貨幣流通の結果に、果たしてどのような意味を持たせるべきであろうか。試案としては、一定のポイントを得た研究者は自己にアワードを与えても良く、またすでに重鎮となった高ポイント研究者は、若手にアワードを与えるなどして後進の育成の為に用いることも考えている。

また今回提案したシステムは、ただ単に、研究者の評価だけにとどまるわけではない。下の図2をごらんいただきたい。

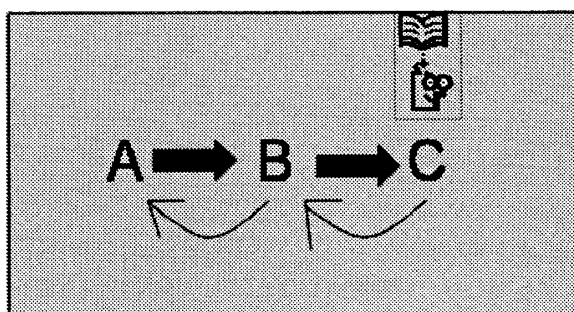


図2 間接的学派影響
(太い矢印が知的影響で、細い矢印が仮想通貨の流れ)

†首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 T.M.U.

日本では、特に法学界で見られる現象であるが、研究者 A と研究者 C の学派が異なり、特に対立関係がある場合、仮に研究者 A が研究者 C に影響を与えていたとしても、C が直接に A を引用することは少ない。C が A を引用しようとする場合、中立的な立場である研究者 B の論文を間に挟むことで、A の影響を受けていたことを隠す傾向がある。仮に、従来の citation の仕組みで考えた場合、A から C への影響を見いだすことはかなり難しい。しかし、今回提案するシステムを用いると、B から A への感謝や学風の影響が仮想通貨の流通によって示され、さらに C から B への学問的謝意も仮想通貨の流通によって示されることとなる。したがって、今回の仮想通貨の流通過程をオープンにするのであれば、C の学問が実は、A の影響を受けていたことが一瞬で把握できるのである。これまでの仮想通貨の研究システムでは、流通過程をトレーサビリティすることに大きな意義は見いだされていなかったが、学会における知の流通を仮想通貨で表すことは、社会における知の体系を鳥瞰するために大きな意味を持つ。

さらに、今回のシステムの長所として、図3に示すような「学会を越えた知の交流」が簡単になしえ、しかもそれを簡単に可視化できることが挙げられる。例えば、図3における研究者 A,B,C が情報処理学会のメンバーであり、D,E,F が電子情報通信学会のメンバーであったとする。情報処理学会のメンバーが電子情報通信学会のメンバーに知的影響を与えたり、またその逆ベクトルが働くことは日常茶飯事である。

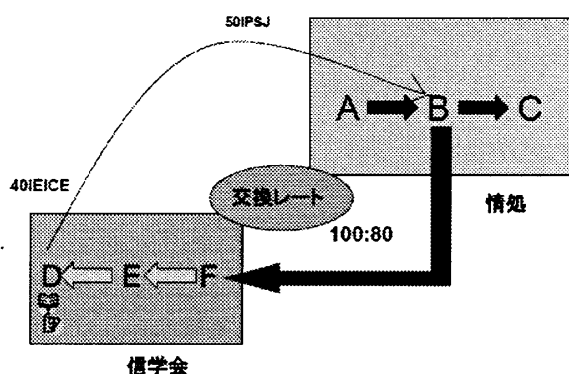


図3 学会間交流 (太い矢印が知的影響)

今回提案したシステムが、二つの学会それぞれで別個に発展したとしても、両学会が協定を結び、一種の「為替レート」に当たる各学会間のポイント交換レートを決めるのであれば、ある学会の内部で流通していた仮想通貨を他学会に容易に流通させることが可能となる。例えば、情報処理学会の仮想通貨単位 100 に対して、電子情報通信学会の仮想通貨単位を 80 で交換するなどの取り決めを行えば、学会を越えた知の交流の体系が見えてくる。図3において、情報処理学会のメンバー B が、電子情報通信学会のメンバー中の F に知的影響を与え、それがさらに E と D に伝播したとする。D は、自分の研究をインスパイアしてくれた B に学問的感謝の気持ちとして、仮に 40IEICE という量の通

貨を B に与えるときは、B のもとには 50IPSJ が転がり込むこととなる。このようなポイント交換は、航空会社のマイレージやクレジットカードのポイント交換システムにおいて実用化されているが、商業界のポイント交換が主として利率の良い方向に流れていくのに対して、今回提案するシステムは、学術的な謝意の表示として仮想通貨を流通させるため、従来の仮想通貨の議論とはかなり異なった流通が予想される[1]。

4. 総括と今後の展望

貨幣の本質的機能は、価値の蓄積・価値の交換・価値の尺度の3つにあると言われている[2]。これまでの仮想通貨システムは、現実世界における価値との交換を前提としていたため、互酬的な行動といえどもそこで営利性を否定することが難しかった[3]。今回のシステムは、「評価」と「感謝」に的を絞る、現実社会での貨幣価値とリンクさせていないので、このシステムを「仮想通貨」と呼んで良いものかという批判もあり得るかもしれない。しかし、研究者間の評価は業界での地位、ひいては所得に直結するものである以上、この仮想通貨システムも経済活動と無縁ではない。また、金融論の教科書にはなくとも、現実社会では慶弔でお金のやりとりがされ、そこでは様々な「気持ち」が貨幣に具現化されて表される。本システムは、金融論や貨幣論といった経済学における古典的な領域が直接の課題としてこなかった貨幣の本質的価値を探るという意味も持ち合わせている。

なお、今後の検討課題としては、

- ①通貨流通のためのインセンティブをどのように与えるか
 - ②流通した通貨の寿命をどうするか
 - ③プライバシーとのかねあいで、流通の全経路を公開して良いか
- 等について、より深い検討を行わなければならないと考えている。

【参考文献】

- [1]西部忠「「グローバル」なバーチャル・コミュニティ通貨「Q」」『City&Life』No63.(2002)第一住宅建設協会
- [2]岩田 規久男『金融入門』(1999)岩波書店
- [3]西畑 俊樹他「クロス=コミュニティ仮想通貨による互酬行動の分析」『情報処理学会研究報告・EIP38』IPSJ SIG Notes Vol.2007, No.120 pp. 45-52(2007)情報処理学会